



▲楽器の音色を披露する  
松前神楽保存会の皆さん  
(千軒そばの花鑑賞会)

主に、先代宮司に師事していたお弟子さんから教わってきました。過去に収録された映像を参考に自主練習も行いますが、それだけでは相当数の演目全てを把握することはできません。基本に立ち返り、祖父の著書「正統松前神楽」を参考として研究し、皆での練習もします。

また、『松前神楽』にはそもそも楽譜なるものが存在しません。笛や太鼓は音源をひたすら聴き、次に身体に教え込み、最終的に皆で合わせ練習を行います。一演目に関し、舞・太太鼓・小太鼓・笛をそれぞれ習得しなければなりません。そして、舞手は楽に、楽は舞手に注意を払い、一つの演目が成立します。舞手と楽人の呼吸が合った神楽を完成させなければなりません。

問3. 演目や楽器が複数あり大変だと思いますが、どのように練習しているのですか？



▲「二羽散米舞」  
(殿様街道探訪ウォーク)

問4. 『松前神楽』の練習をする上で、大変だったことは何ですか？

神楽のない地域とは違い、『松前神楽』が根付いている地域は、祭りを始め、様々な行事に神楽が欠かせません。そのため、神楽を二の次とすることができない現実がありました。

長年保存会に所属していたベテランが様々な理由で引退される中、現在はわずか8人で構成されており、最年長者が私で最年少者が小学生と、平均年齢が大変若い保存会です。先代宮司の時から心強いお弟子さんがいるとはいえず、限られた人数で、決して容易ではない技術の習得と維持継承は、常に克服しなければならぬ課題でありました。技術の取得はもちろんのこと、楽人と舞手が一つとなつて格調の高い神楽となります。今までもこれからも、時間を有効に活用し、研鑽に励まなければならぬと再認識しております。

問5. 『松前神楽』を通して、やりがいを感じることは何ですか？

神楽に昔から慣れ親しんでいる方々が、私たちの演じる『松前神楽』を懐かしそうにご覧になっていたり、リズムカルな演奏を聴いて、足でリズムを取られていたりして印象的でした。また、「見ているだけでも楽しかった」「小さい頃から慣れ親しんでいる神楽」というお声を頂くと、嬉しくも大変ありがたく感じます。

『松前神楽』は神様に捧げるものですが、たくさんの方々に楽しんでいただく、楽しそうなお言葉や褒めのお言葉をいただく、自身の戒めとさせていただくと共に、やはり強いやりがいを感じます。



▲「鬼形舞」  
(千軒そばの花鑑賞会)

問6. 『松前神楽』が国の重要無形民俗文化財に指定されましたが、今の心境をお聞かせください。

文化庁長官から文化財指定証書を受け取った時、改めて「とても重要なことである」と再認識しました。念願が叶い嬉しく思いましたが、同時にそれ以上の重圧を感じました。今後、我々の舞う松前神楽は国が指定した重要無形民俗文化財であるという視点で視られることになるでしょう。国指定という大きな冠に恥じぬよう、今後一層研鑽に励まなければなりません。ただし、そればかりを意識し『松前神楽』の表現する「道徳心」や、神や自然を敬う人々の思いなどの「本義」を忘れることなく、維持継承に努めなければなりません。今まで、我々の神楽に向き合う姿勢に反省はあっても、後悔はありません。しかし、未だ未熟であることを常に心に留め、『福島町の松前神楽』に深い思いを寄せてくださり、陰日向となって支えてくださった方々を落胆させることのないよう努めなければなりません。今回の国指定が後押しとなり、『松前神楽』が福島町の活性化に繋がれば、この上ない幸いです。